
クロッシング

みつほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロッシング

【Zコード】

Z8090A

【作者名】

みつほ

【あらすじ】

最初の出会いは、次の出会いを呼ぶ春の桜が舞い降りるなか、とある大学では噂の女がいた。プレイガール…これが、その女の影での呼ばれ方…でも

プロローグ

春夏秋冬と言つ季節が過ぎて、また、春が来る

まだ、寒さが残る2月の頃、一つの男女が、暗い会話をしている。

「別れたいんだ」

そう、別れを切り出したのは、男の方

「お前がよく分かんねえんだ。俺は、お前と釣り合つ事ができない

気がする」

弱音を吐くように、男は語る。だが、女の方は、表情一つ変えること無く、小さく頷いて見せた。

男も、それ以上、言つこともない……いや、言えなくなると

そのまま、背を向けて、じやあなつと言葉を残し、歩き出す。
どことなく、振り向くのをこらえている様な、未練を残した表情で、
歩いて、その女の元から姿を消す。

まだ幼さを少し残す、その女は……まだ、10代くらいだらうか、彼女の顔には、悔しさ・悲しさ・寂しさなど、まつたく残つていなかつた。

ただ、平然として、『別れて当然』と、言つたような無表情さがあつた。

だが、彼女は、小さな声でボソリと、言葉をもらした。

「何でだらう……」

そう 一言

季節は巡る 春は来る

出会いが待つ 春が来る

第一話 季節は…（前書き）

一人称ではなく、恋愛ものは書けるのか?と、思ったので、書いてみるつもりです。恋愛ものは苦手なので、のんびりと投稿すると思います。宜しくお願いします。

第一話 季節は…

桜が風により舞い降りる姿は、少し気持ちをホッと和ませる気がする。

そんな風に思つたことは無いだろうか。

「あれって、水瀬 幸恵じやないか？」

そう、話を振られた人は、鹿嶋豊^{かしま みのる}、髪を薄い茶色に染めた健康そうな感じがする青年。

今年の春、晴れて大学生になつた学生である。

その、豊に話しかけてきたのは、大学に入つて最初に仲良くなつた二人の仲間。

「みなせ、ゆきえ…て、何で、名前知つてるんだよ。もう、大学先輩キープつてか？」

そう豊が、友達の一人に振るが、友人達は、顔を見合すと、一人は呆れた顔、もう一人は笑いながら突っ込んだ。

「あはは、お前最高！真顔で『大学先輩キープつてか？』だつて、腹ねじれそう…」

「そこまで、笑うかよ」

豊は、カツコイイ台詞が似合わない、それは雰囲気にある。

彼は、女友達とかに、可愛いと見られやすい、身長は170は、いつているがキザな台詞なんか言つた日には、女達の格好のおもちゃだ。

「わりいわりい、だつてお前、そんな台詞が似合う奴に見えなくつてさ」

「それに、大学入つてそつそつ、先輩の名前、覚えられる訳が、無いだろ？？まつたく講義の時間が違うしな？」

「じゃあ、なんであいつを…？」

「んなのあたりまえじゃん、同じ一年で“プレイガール”だつて、

噂だぜ？」

そんな、根も葉もない噂が、何処から来たのかは、知らないが、豊の友人達はノリノリだった。

「こんど誘うか? など、話しているが、豊本人は、そんな事には、どうしてもついていけなかつた。

だが、本当に有名らしく彼女の名前を他の友人に振ると「興味でたのか?」「辞めとけ」など、言われてしまつ。

彼が、分かつた事は関わつてはいけないつて事だけだつた。

春が温かみをましてきた日、大学の図書館で豊はボーッとしていた。

「…あ、れ? あれ? ええ! ?」

腕にある時計を見て叫ぶ、

（なんて事だ…寝てしまつていて。しかも、友達は俺を置き去り、置手紙だけ残して遊びに行つているし）

時間は、午後6時をさすころだつた。広げていたノートと本をしまい。図書館を後にす。

「はあ…あ、バイトも探さないとなあ」

何気なく思つた事を口にする。図書館の外で大きな背伸びをして歩きだす。すると、開いていたバックの中からファイリングしていなかつたノート（ルーズリーフ）が落ちた。

「あ!」

慌てて、拾つて鞄に仕舞う。

そして、前を見たとき、誰かが門をぐぐつて、歩いてくるのが見えた。

（誰だ?）

女の人に見える、幼さが残つてゐるところからして、多分、同じ一年だと豊は感じた。

だが、もう6時、ほとんどの学生は帰つてしまつて、とても静か、彼の横を通つていく彼女の、肩まで長い黒い髪がなびいて見えた。

（綺麗な髪…顔立ちも、好みかも）

そう思いながら、その場を後にしようとした時

「待つて、そこの君」

そう、澄んだ掠れた声が聞こえた。

止まって振り向くとあの女性が立っている。

「な、何？」

つい、ドキッとしてしまった。

「これ。もしかして…君の？」

そう言つて見せてきたのは、講義のプリントだった。全部拾つたつ
もりが、まだ落ちていたのだ。

「あ、本当だ。ありがとう」

慌てて近寄つて手にする。が、彼女は「じゃあ」と言つてその場を
離れようとする。

「ちよ、待つてよー君は何年？俺、一年の鹿嶋ー！」

そう叫んでいた。

「…だから？」

素つ氣無い、普通は、名乗るものじゃないだろうか
「だから、な・ま・え！—」

「誰の？」

「君の」

そこまで言つとああ、と言つた顔をして

「幸恵」

「……え」

「水瀬 幸恵…ばいばい」

それだけ名乗ると、講義をする部屋へと足をのばす。

豊は、ショックだった。タイプだと思った女が、なんとあの、大学
で有名な女だつたわけだ。

「マジかよ…」

ちよつヒビリのショックでは、なれどつだ。

太陽が、沈む夕方の講義室・・・

そこに、黒髪が光に反射するほど綺麗で、肌が白く、少し幼さを残した女性…いや、少女がある、デスクで立っていた。

「あつた…」

手にしたのは、可愛らしいキー ホルダーだった。それを手にして大學を後にした。

（さつきの人、もう帰ったよね）

辺りを見渡して、ちょっと残念そうに思った。

第一話 季節は…（後書き）

どんな話にしになつていいくかは、まだ秘密です。ベタな終わり方になりそうで、少しへキドキです。主人公は、多分、幸恵だと思います。

第一話 次の日

無口に見えて話しかけずらい印象を見せる彼女、水瀬幸恵は、話せば普通に会話ができる。

その為、影で何を言われていようと関係なく、普通に友達の1人や2人は、出来ていたりする。

今は、皆で食堂で昼食の真っ最中。だけどそんな、楽しい箸の食事の中で

「水瀬つーぞ、『男遊び』をよくするつて噂、本当なの〜？」

なんて、ふざけて聞いてくる学生もいる。

それに対しても、天然なのか「さあ？」と、答えて昼食をまた再開する幸恵に誰もが言葉が詰まる。

「あ…」

幸恵が、思い出したかのように口を開いた。

「今何時だろ？」

そう言いながら、携帯の時計に手をやると、慌てて立ち上がりて荷物を手に持つ。

友達は、不思議そうに聞いてきた。

「何？次の講義とか？」

「ううん」

「じゃあ……誰かに会いに？好きな人？」

「うん」

ふざけて聞いたつもりが、すんなりと返事をされて、皆驚いて固まる。だが、すぐに幸恵に食つて掛かる。

「誰？誰なの？」

「これから付き合つてんのよ！てか、あの噂、マジもん？！」

食堂で、騒ぎだす。それでも、幸恵だけが、不思議そうな目で友達を見る。

「付き合つてるつて言つより…昔からの『大切な人』？」

わざとなのか、それとも素なのか、友人達は、つざつたそうに幸恵に目を向ける。

「じゃあ」

それだけ、口にすると、幸恵は、その場から立ち去ってしまった。

「な、何あれ…マジでボケてるわけ？」

「じゃないの？ そうじゃなかつたら、私、絞め殺してそう」
幸恵がいなくなつた、そのテーブルでは、まだ話は、終わらない。
更なる、話題が広がつてしまつてゐるから。

* * * *

「おい、鹿嶋」

「…………え？」

「講義、終わつてんぞ？」

そう言われて豊は、辺りを見渡した。

講義室には、学生がほとんどいない、豊に声をかけたのは、仲良くなつた2人の友人の一人、富永とみなが肇としだつた。

「あれ、いつのまに」

「10分前くらいから、教室出た時、お前の姿がないから懇々戻つてきてやつたんだ。感謝し」

富永は、あたかも普通のよう、えばつてみせる。

「はいはい、ありがとさん」

そう言いながら、豊は立ち上がり、鞄を持つと講義室から出る。
その後ろを、富永がのんびりと追つ。

「鹿嶋、講義始まつてから、この時間まで、ノート取りりゅう、ずっと上の空なんて珍しいな？」

「別に、今日は、やる気無かつただけだし」

「あ、そ、単位落とすなよ~」

「え、ちょっと！ノート[印]せせりよ！てか、今日の講義のやつた範囲だけでも教えるよ」

そんな感じに、青春（？）を満喫している豊なのだが、この前のが忘れられないでいた。

幸恵との出会い、まさか、好みだと思った相手が、あの陰口叩かれていた女だと、思つても見なかつたからだ。なんだか、どう自分の頭の中で整理していいか、良く分からなくなつていて。そんなこんなで、講義の内容なんて、頭に入らない。

まるで、色ボケしているかのよう…溜め息だけが漏れる。

* * * *

賑やかな午後少し過ぎの駅の側の通り

「ええ～～～～～！」

その駅の側にある、オープンカフュの喫茶店で、高い声の叫びが響く。通りを歩くものは、その声を追つて、目線をチラチラ送る。声を上げた女性は、少し頬を染めて、声のトーンを下げて、誰かに話しかけた。

「ちょっと、私が女だつて言つてないでしょうね？」

「言つてないけど？どうして？」

その女性が話していたのは、水瀬幸恵だつた。

幸恵の大切な人とは、この女性の事なのだろう。名を、松本由貴と言つ。幸恵は、幸恵と同じくらい。

幸恵が、162cmくらいで、その身長と変わらない。

ポニーテールをした。面倒見のよそそつな、女性だ。実を言つと、幸恵とは、中学の時からの付き合いだつたりする。

彼女は、少し安堵すると、幸恵に言つた。

「良かつた～、変な誤解されたら、『ひひひひひかと思つたじゃん』

「ふ～ん…」

「あのね、大学の友達に誤解されるよ'つな事、止めとよ?..」

「そ'う? だつて『大切な人』つて、一番の友達の事を言'うんでしょ?」

「違'わよーある意味、違わないけど、一般的には、勘違いされる

の…」

「そ'うなんだ…じゃあ、次の講義で会つときにはちゃんと、説明しておく」

ウエイターが持つてきたショートケーキをパクパク食べながら、幸恵は、由貴に言った。

「もう、あんたが心配でしょ'うがないよ。大学違'しあり、何かあつたらメール、忘れないでよ?..」

溜め息をつくよ'うに、由貴は、そう言い放つた。

それに対し、ケーキを口に運びながら、口ク「ク」とふくらへうなづく。

幸恵は、心のどかで由貴はやつぱつ、一番の友達と思つた。

第一話 次の日（後書き）

結構、恋愛モノって難しいですね。ちょっとビックリです。
なので、下手な突つ込みは、ご勘弁下さい（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090a/>

クロッシング

2011年1月4日14時24分発行